

佐太南地区遺跡試掘調査報告書

1994年3月

島根県鹿島町教育委員会

さ だ か な み
佐 太 南 地 区 遺 跡
試 挖 調 査
報 告 書

目 次

1	I. 調査の経過
2	II. 位置と歴史的環境
4	III. 調査の概要
4	第1・2調査区
7	第3・4・5・7調査区
8	第8・9・10・11調査区
9	第12・13・14調査区
10	第15・16・17調査区
11	第18・19・20・21・22調査区
12	第23・23B・24調査区
14	第25・26・27調査区
15	第28調査区
16	第29・30調査区
17	第31調査区
18	第32・33・34・35・36調査区
19	第37調査区
20	第38・39・40・41・42調査区
22	第43・44・45・46調査区
23	IV. 小 結

例 言

1. 本吉は、鹿島町教育委員会が平成4・5年度に実施した佐太南地区農村活性化住環境整備事業に先立つ遺跡分布調査の記録である。

2. 調査地所在地と、ご協力いただいた土地所有者のご芳名は以下のとおりである。土地所有者の方々には、この場を借りて厚くお礼申し上げます。(敬称略)

調査区	所 在 地	土 地 所 有 者	調査区	所 在 地	土 地 所 有 者
1	鹿島町大字佐陀木郷1103-1	平 塚 幸 大	24	鹿島町大字佐陀木郷1548	安 達 武 美
2	" 1102	安 達 アサエ	25	" 1707-1	中 村 順
3	" "	"	26	" 1758	平 塚 富 善
4	" 1157-2	安 達 良	27	" "	" "
5	" "	"	28	" 1679	山 本 武 是
7	" 1357-1	大 森 昭	29	" 1878-1	中 島 征 司 郎
8	" "	"	30	" "	" "
9	" 1353	森 協 遼 之	31	" 1905	錦 織 一 成
10	" "	"	32	" 1967	内 村 勝 利
11	" 1348-1	安 達 良	33	" 1982-1	川 上 英 男
12	" 1340-1	森 協 悪	34	" 1982-4	坂 本 明 道
13	" 1345	井 上 喬 一 郎	35	" 2012-2	吉 岡 正 治
14	" 1339-1	森 協 弘	36	" 2017-1	錦 織 泰 一
15	" 1337	中 村 順	37	" 2057	吉 岡 恵 美 子
16	" 1334-1	安 達 隆 男	38	" 2146-3	吉 岡 貞 旗
17	"	平 塚 均	39	大字古浦292-1	鹿 島 町
18	" 1365-3	森 協 美智男	40	" 346	"
19	" 1369-1	真 神 万 一	41	" 350	"
20	"	平 塚 均	42	大字佐陀木郷2330-1	森 協 威 大
21	" 1455-1	勝 部 達 治	43	"	"
22	" 1506	中 村 二 郎	44	"	"
23	" "	"	45	"	"
23B	" "	"	46	" 1692-2	川 上 文 男

3. 調査は平成4年12月1日から平成5年12月13日まで断続的に実施した。調査体制は以下のとおりである。

事務局	曾 田 稔	(鹿島町教育委員会教育次長)
	青山俊人郎	(同 社会教育係長)
調査員	赤沢秀則	(鹿島町教育委員会主任主事)
	宮 田 健 一	(同 請託、平成5年度)
調査補助員	水口晶郎、岡 泰道、石橋淳一、曾田秀徳	
作業員	平塚富善、川下晴大、井上一郎、新宮嘉夫、平塚芳秋、中島治雄、近藤一郎、安達善也、中 村 敏、曾田芳子、長瀬美江子、中村絶子、井上一榮、中島美喜子、加藤和枝	
遺物整理員	朝山千鶴、中島美喜子(以上、鹿島町立歴史民俗資料館)、宮田健一、水口晶郎、岡 泰道、石橋淳一、曾田明子	

I. 調査の経過

鹿島町大字佐陀本郷から大字古浦にかけては、銅剣、銅鐸が出土した志谷奥遺跡、海岸砂丘上の集団墓地と考えられている古浦砂丘遺跡など著名な遺跡が多い。また、「出雲國風土記」には「恵
曇坂」など具体的な状況が描写されている。しかし、この付近での埋蔵文化財の調査は少なく、集落などの動向はつかめていない状況にある。

佐陀本郷から古浦にかけて、佐太南地区農村活性化住環境整備事業が計画され、計画区域内の埋蔵文化財の有無を調査する必要が生じた。第1次調査として平成4年10月中旬に区域内の踏査を行い、遺物散布状況および地形から8箇所の遺跡候補地（候補地№1～№8）を抽出した。

第2次調査は、この遺跡候補地を対象に現水田面には原則として 2×2 mの調査区を、丘陵部では若干長いトレンチを設定して、試掘を行った。遺跡候補地と試掘調査区との関係は、遺跡候補地№1がG1～3に、№2がG4～18に、№3がG19～23Bに、№4がG24～27に、№5がG28～36に、№7がG37～38に、№8がG39～41に相当する。調査は、平成4年12月1日から翌平成5年1月18日まで、G1からG38までを調査した。このうち、G27では田下駄、加工痕のある板材などが、G37では奈良～平安時代頃と考えられる須恵器、上飾器が出土し、それぞれ遺跡を発見したものと判断した。前者を稗田遺跡、後者を下谷遺跡と名付け、遺跡発見の手続きを行った。平成4年度は、遺跡候補地№6、№8については調査を実施できず、翌平成5年度に行うこととした。

平成5年度は、前年度発見した下谷遺跡、稗田遺跡の発掘調査を松江農林事務所からの受託事業として行う一方、残った候補地№8について試掘（G39～41；12/2～13）を行い、また、新たに土取りが計画された地点をG42～G45（7/21～8/2）、佐太南地区事業に伴う集会所移転予定地をG46（10/9～16）として試掘を行った。G42～G45の調査区のうち、G42では調査区内に柱



図1 鹿島町位置図

穴などがあり、中世の遺物も出土したので、遺跡と判断し伴次山遺跡とし、事業者には遺跡の範囲内は土取りの工事から外すよう協力を依頼した。G46では、隣接して調査を行っていた稗田遺跡との関係から遺跡の存在が予想されたが、調査を行った地表から約2mの深さまででは遺跡の存在は明らかにしえなかった。

II. 位置と歴史的環境

鳥根半島のほぼ中ほどに位置する鹿島町大字佐陀本郷から大字古浦にかけての平野は、西に日本海をひかえる肥沃な耕作地となっている。

この平野内および鹿島町域内での縄文時代の様子は前期の「^{佐太講武貝塚}」¹⁾を除いて、いまだよく判明していない面があるが、講武盆地では北講武氏元遺跡²⁾で、後期の上器片少量と晚期系の上器群が出土しており、さらに縄文時代の遺跡が存在するものと考えられる。佐太講武貝塚は、貝の散布範囲が指定を受けているのみで、当時の集落そのものの範囲などはいまだ明らかでない。貝塚を構成する貝は、ほとんどが汽水性のヤマトシジミで占められ、鹹水産のものはわずかである。このことは、貝塚が形成された当時、周辺部が潟湖としてこうした貝の成育に適した環境にあったことを知られる。この潟湖は、後の『出雲国風土記』にいうところの「^{佐陀水海}」、「^{恵曇波}」の前身と考えられ、こうした水域からヤマトシジミを主とする魚介類を採取し、周辺の山野に堅果類や鳥獸を求めていたものと思われる。

弥生時代には、先述の北講武氏元遺跡で縄文晚期系の上器と弥生時代前期の土器がともに出土しており、講武盆地を舞台に初期水田が開発されたことが知られる。また、大字古浦の古浦砂丘遺跡³⁾では、前期の集団墓地が調査されている。この墓地に埋葬された人々の集落や水田址などは未検出である。盆地西南端には弥生前期からの「^{佐太前遺跡}」⁴⁾が存在する。この平野南側の山腰には、銅鐸、銅剣を埋納した志谷奥遺跡⁵⁾がある。この平野での弥生時代の遺跡は少ないが、古浦砂丘遺跡、志谷遺跡などの内容をみれば、今後の調査により、講武盆地に匹敵する遺跡を埋蔵する地域と考えられる。また、古墳時代についても、ともに疊床をもつ箱式石棺である白畠古墳、狐塚古墳⁶⁾が知られるほか、横穴墓群も多数知られており、その分布から古墳時代後期の段階には、集落が点と成立しているものと考えられる。

『出雲國風土記』には「恵曇波」としてこの平野中心部付近と考えられる景観が具体的に描写されているほか、先述の古浦砂丘遺跡の上層には、古墳時代後期から奈良時代頃にかけての包含層が存在し、砂丘上が当時の集落となっていたことが知られ、これが『風土記』秋鹿郡恵曇波の条記載の「並びに家あり」に相当する集落と考えられる。やはり恵曇波の条では、『風土記』編纂当時の島根郡大領社部臣訓麻呂の祖先、波蘇らが岩塙を2か所で掘り抜いたことを古老の伝として記している。

近世、松江藩によって宍道湖と日本海を結ぶ運河、佐陀川が開削されると、宍道湖沿岸の水害が緩和され、日本海側の集落と城下松江との水運が開け、漁獲物の輸送が盛んになる一方、古浦で行われていた製塩は真水が流れ出るようになりすたれていった。

1. 佐大議院貝塚
2. 吉浦砂丘遺跡
3. 佐大前遺跡
4. 志谷奥遺跡
5. 狐塚古墳
6. 白地古墳
7. 寺尾塚穴群
8. 山田古墳
9. 姫谷寺の上古墳
10. 姫谷寺の塚穴群
11. 姫谷寺の奥塚穴群
12. 一矢塚穴
13. 名分丸山古墳群
14. かまの古墳群
15. 免の塚穴
16. 免目古墳群
17. 田中の塚穴群
18. 免目塚穴群
19. 芦山塚穴群
20. 池平塚跡
21. 氏穴遺跡
22. 本木谷遺跡
23. 美才古墳群
24. 鶴齢山古墳群
25. 藤山古墳
26. 滝山遺跡
27. 尾坂古墳群
28. 北講武氏元遺跡
29. 南講武小堀遺跡
30. 南講武豆田遺跡
31. 岩脣古墳
32. 堀割古墳
33. 伊貝山城跡
34. 吉浦經塚

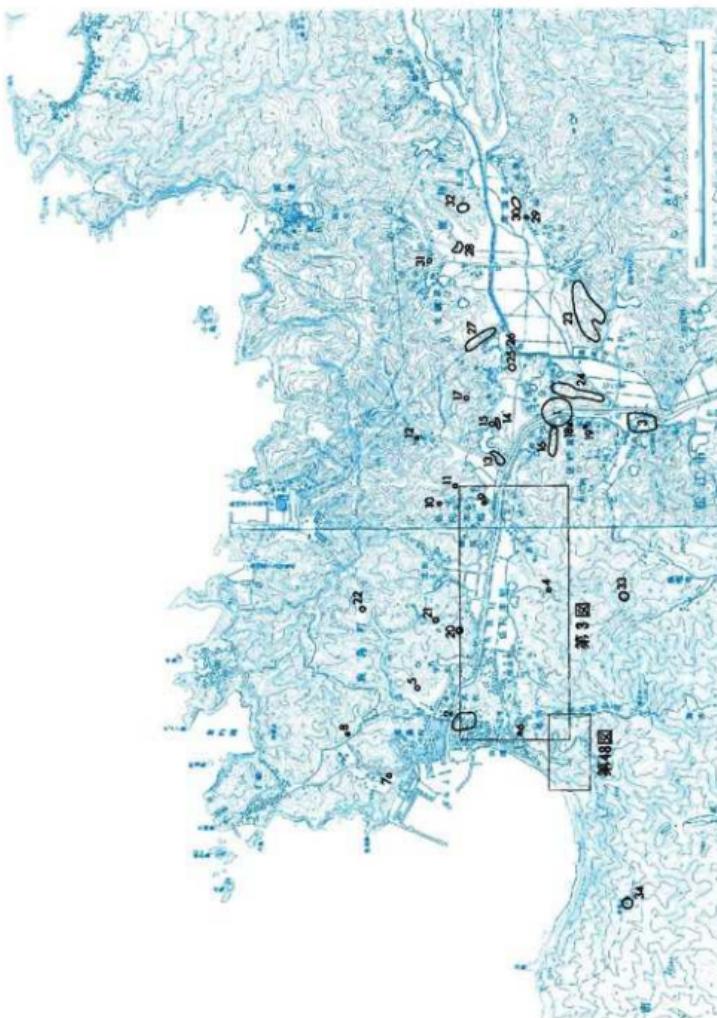


図2 調査地周辺の遺跡 (1 / 500000)

III. 調査の概要

今次の調査は、鹿島町の西南部、大字佐陀本郷、大字古浦にまたがって計画された佐太南地区農村活性化住環境整備事業に先立って試掘調査を実施したものである。整備事業計画地内には、周知の文化財は存在していなかったが、近接して銅鐸 2、銅剣 6 を埋納した志谷奥遺跡、砂丘上に営まれた弥生時代前期の集団墓地と考えられる古浦砂丘遺跡、古墳時代後期の円墳古墳など、点々と周知の遺跡が存在したことから、この計画地内にも遺跡の存在が予想されたため、この区域内で計46箇所の試掘調査区を設定して調査を行ったものである。調査区は、調査終了後埋め戻し、調査杭も除去するため、杭を國上座標に取り付けて、将来の調査に備えた。

このうち第27調査区では古代に位置付けられると考えられる木製品が大量に包含されていることが判明し、第37、38調査区では古代から中世にかけての遺物が出土し、集落が埋蔵されていると考えられた。また、第42調査区でも、古代から中世にかけての遺物が出土し、当時の住居が存在することが予想された。このため、当該地の字名を冠して、第27調査区周辺を稗田遺跡、第37、38調査区周辺を下谷遺跡、第42調査区周辺を伴次山遺跡として、それぞれ遺跡発見通知書を提出した。

この調査結果を受けて、事業主体者である松江農林事務所、町建設課と協議を重ね、稗田遺跡、下谷遺跡については、平成5年度松江農林事務所からの受託事業として発掘調査を実施し、伴次山遺跡については、遺跡の範囲と考えられる第42、43調査区周辺を工事範囲から外して、現地で保存していくだけのこととなった。

今回の調査地周辺は、志谷奥遺跡や『出雲国風土記』にみえる恵曇波などの頗るな遺跡が知られているながら、その実態には不明瞭の点が多くあった地域での調査で、この地区的古代史像解明に基礎的なデータを提供するものといえよう。

第1調査区

北に向かって緩やかに降る斜面に設定した調査区で、調査前の地表標高は2.9mである。南壁で電柱柱根3本がかかっているが、基本的には地表から約1mまでが粘土層、それ以下が有機土層となっている。出土遺物はなかった。

第2調査区

第1調査区の南東約20mに設定した調査区で、調査前の標高は約5mである。ここでは第1調査区のような有機土層は認められず、地層の堆積状況にも乱れが認められるので、佐陀川開削時の揚上の可能性がある。出土遺物はなかった。

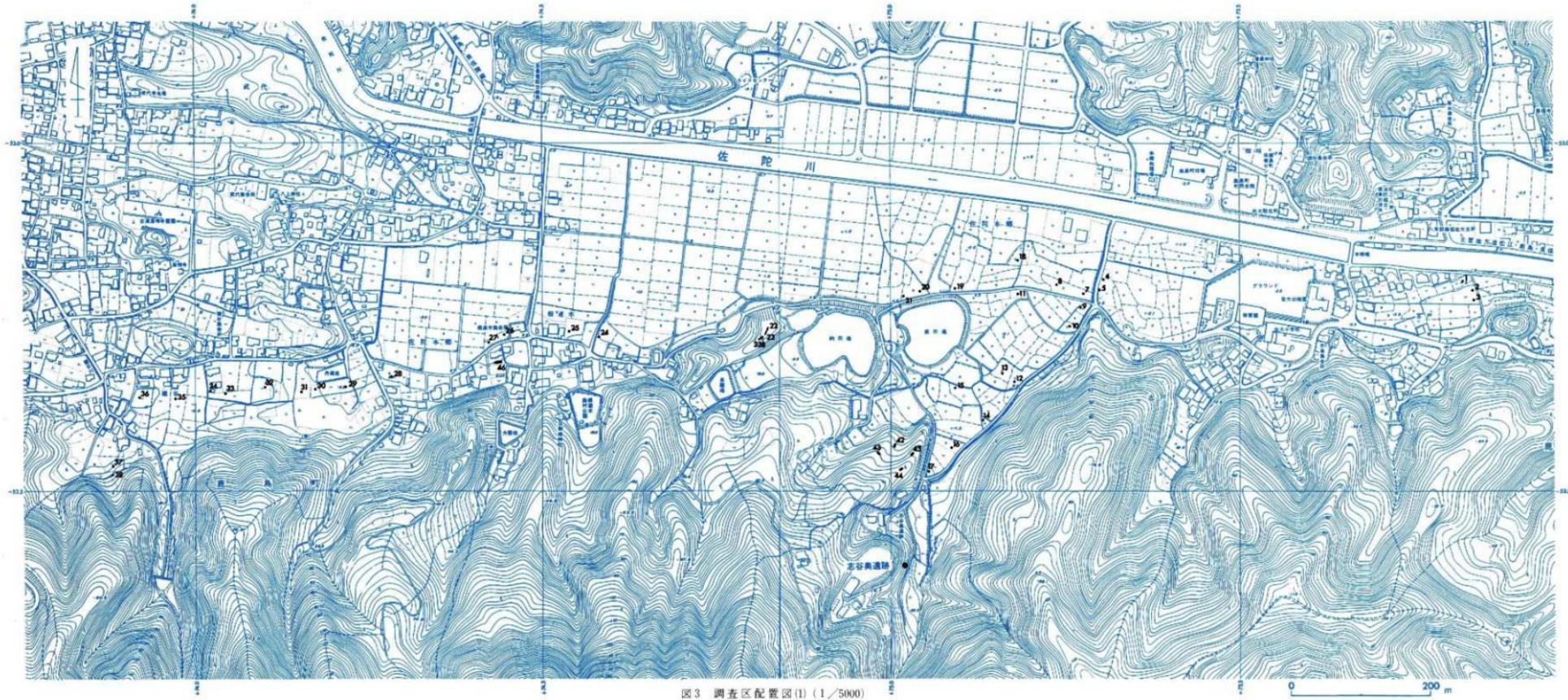


図3 調査区配置図(I) (1/5000)

第3調査区

第2調査区の南約15mに設定した調査区で、調査前の標高は約5.7mである。第2調査区のような佐陀川開削時の褐土は認められない。また、有機土もここでは認められなかった。出土遺物もない。

第4調査区

第1～3調査区から約500m西の丘陵突端部下面の水田面に設定した調査区で、地表の標高は2.3mである。上層はほぼ水平に堆積しており、標高1.4mで検出された淡青緑色砂砾が、西に向かって緩やかに降っている。出土遺物はなかった。

第5調査区

第4調査区の南約15mの水田面に設定した調査区で、地表の標高は3.3mである。土層はほぼ水平に堆積しており、暗灰色粘土層が淡青緑色砂砾層の上に乗っている。淡青緑色砂砾層上面の標高は1.7mである。

第7調査区

第5調査区の西約25mの

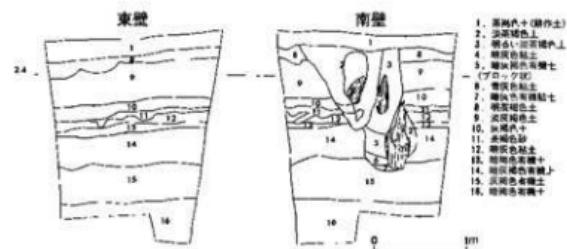


図4 第1調査区 (1/60)

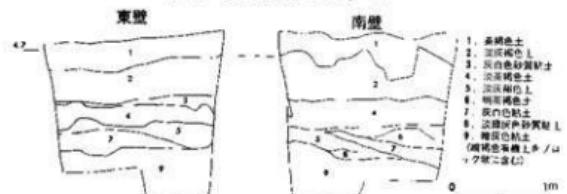


図5 第2調査区 (1/60)

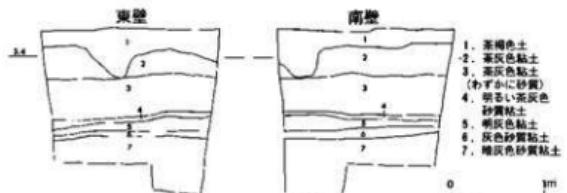


図6 第3調査区 (1/60)

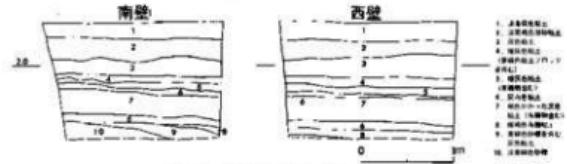


図7 第4調査区 (1/60)

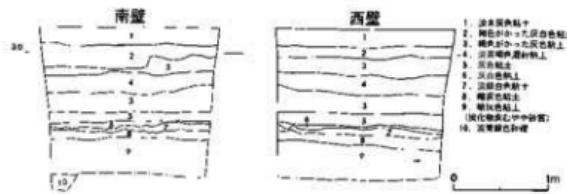


図8 第5調査区 (1/60)

水田面に設定した調査区で、地表の標高は3.1mである。土層はほぼ水平に堆積しており、調査区底部には青灰色砂礫、暗褐色砂礫がある。出土遺物はなかった。

第8調査区

第7調査区の西約40mの水田面に設定した調査区で、地表の標高は3.1mである。土層はほぼ水平に堆積しており、調査区下半で土器片1が出土している。1は弥生土器底部で、表面が著しく磨滅しているが、大粒の砂粒を多く含むことから、弥生時代前期のもの可能性がある。

第9調査区

第7調査区の南約20mの水田面に設定した調査区で、地表の標高は3.7mである。土層はほぼ水平に堆積しているが、緑がかかった灰色砂質粘土は北に向かって緩やかに降っている。

第10調査区

第9調査区の南西約30mの丘陵下の水田面に設定した調査区で、地表の標高は約4.0mである。出土遺物はなかった。

第11調査区

第8調査区の西約50mの水田面に設定した調査区

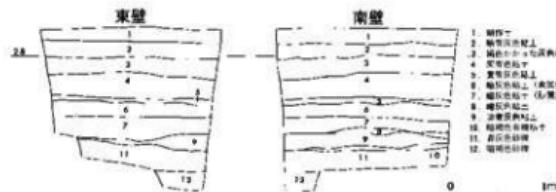


図9 第7調査区 (1/60)

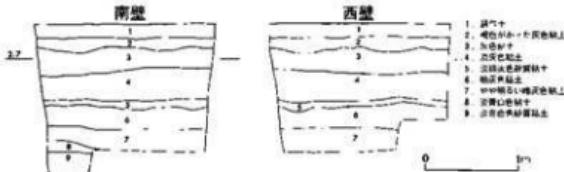


図10 第8調査区 (1/60)

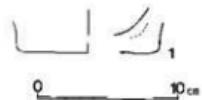


図11 第8調査区
出土遺物 (1/4)

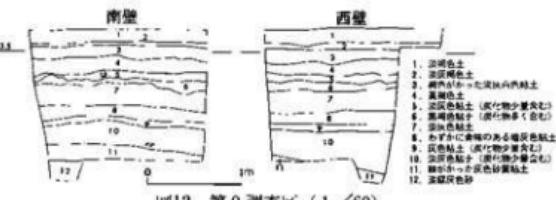


図12 第9調査区 (1/60)

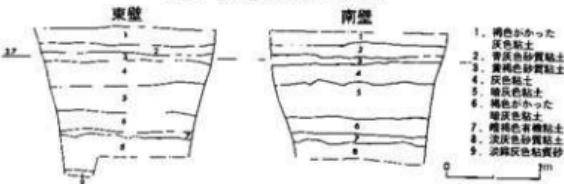


図13 第10調査区 (1/60)

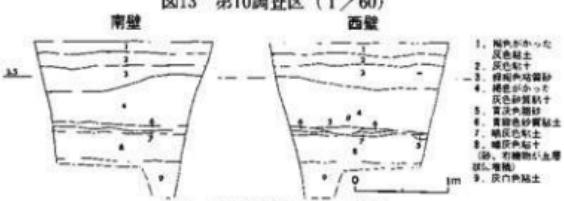


図14 第11調査区 (1/60)

で、地表の標高は約3.9mである。最下に灰白色粘土があり、その上に砂と有機物が互層状に堆積する暗灰色粘土層がある。

土器2点が出土しており、2は弥生上器で中期から後期の底部、3は上器器で占墳時代中期の椀ないし高杯杯部であろう。

第12調査区

第11調査区の南約150mの丘陵下の水田面に設定した調査区で、地表の標高は約7.3mである。炭化物、有機物を含む暗灰色粘土が東に向かって降っている。出土遺物はなかった。

第13調査区

第12調査区の北西20mの水田面に設定した調査区で、地表の標高は約7.3mである。土層はほぼ水平に堆積している。出土遺物はなかった。

第14調査区

第12調査区の南西70mの丘陵下の水田面に設定した調査区で、地表の標高は約10.1mである。南壁で大きく降る茶褐色砂礫層がある。この上面の暗灰色粘土層中に土器片が含まれてい



図15 第11調査区出土遺物 (1/4)



図16 第12調査区 (1/60)

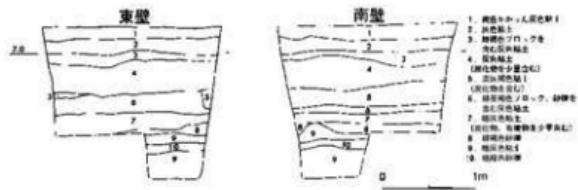


図17 第13調査区 (1/60)

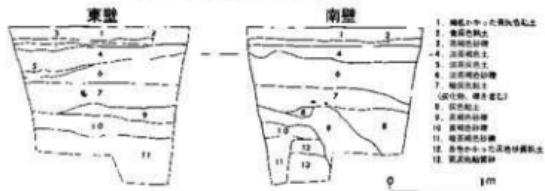


図18 第14調査区 (1/60)



図19 第14調査区出土遺物 (1/4)

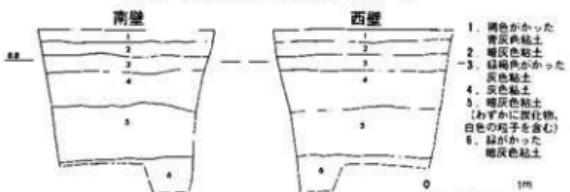


図20 第15調査区 (1/60)

た。

4は弥生土器かと考えられる破片、5～8は須恵器で、5は甕口縁部で外面突起下にクシ描きの波状文がある。6は壺体部下部、7、8は壺体部片である。

第15調査区

第14調査区の北西約60m、谷のほぼ中央部の水田面に設定した調査区で、地表の標高は約9.1mである。土層はほぼ水平に堆積している。出土遺物はなかった。

第16調査区

第14調査区の南西約60mの丘陵下の水田面に設定した調査区で、地表の標高は約12.1mである。土層はほぼ水平に堆積しているが、下半で褐色砂礫の落ち込みがある。出土遺物はなかった。

第17調査区

第16調査区の南西約50mの谷奥部の水田面に設定した調査区で、地表の標高は約14.3mである。上層はほぼ水平に堆積しており、出土遺物はない。

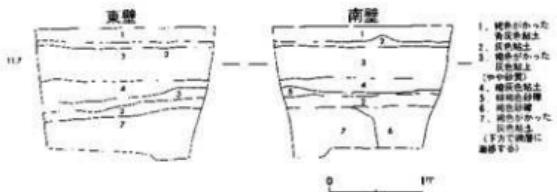


図21 第16調査区 (1 / 60)

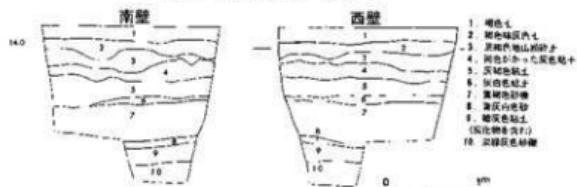


図22 第17調査区 (1 / 60)

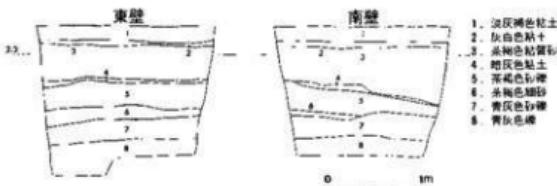


図23 第18調査区 (1 / 60)

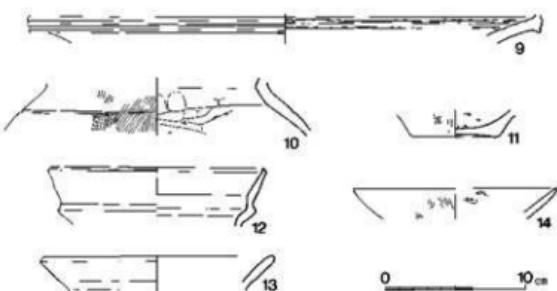


図24 第18調査区出土遺物 (1 / 4)

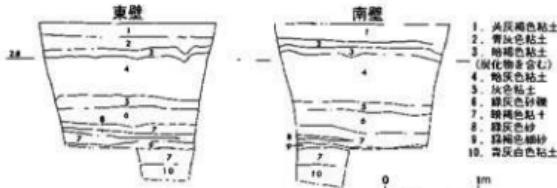


図25 第19調査区 (1 / 60)

第18調査区

第11調査区の北50mの水田面に設定した調査区で、地表の標高は約2.6mである。調査区下半の砂礫層からわずかではあるが、遺物が出土した。9は弥生時代中期の壺口縁部、10、11は同後期の甕であろうか。12、13は弥生時代終末から古墳時代初頭の甕、14も同時期の低脚杯であろう。

第19調査区

第11調査区から西へ90mの森田池堤防下に設定した調査区で、地表の標高は3.2mである。土層はほぼ水平に堆積し、粘土層と砂礫層が互層状に認められた。出土遺物はなかった。

第20調査区

第19調査区の西50mの森田池堤防下に設定した調査区で、地表の標高は約3.5mである。北東に傾斜する堆積を示し、砂礫と有機物が互層状に認められる。出土遺物はなかった。

第21調査区

第20調査区の西20mの森田池堤防下に設定した調査区で、地表の標高は約3.1mである。わずかに北に向かって傾斜した堆積を示す。砂礫と有機物粘土層が互層状をなす。出土遺物はなかった。

第22調査区

第21調査区の西約200m、納田池西側の丘陵尾根上に設定した調査区で、地表の標高は22.8~22.3

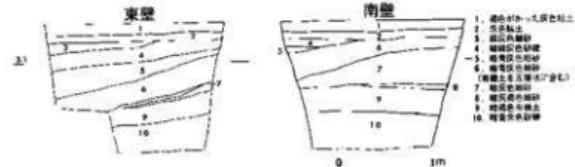


図26 第20調査区 (1/60)

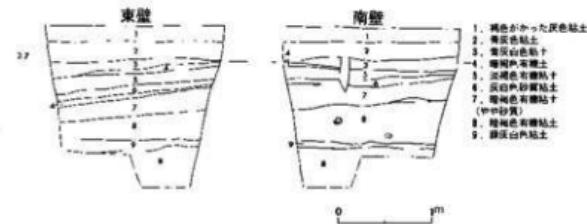


図27 第21調査区 (1/60)

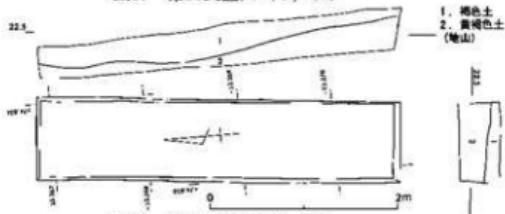


図28 第22調査区 (1/60)

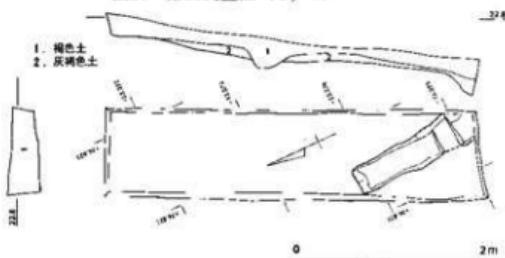


図29 第23調査区 (1/60)

mと南がやや高い緩傾斜地である。表下下はすぐに黄褐色の地山で、遺構などは認められず、出土遺物もなかった。

第23調査区

第22調査区に隣接して設定した調査区で、地表の標高は22.8~22.4mと北がやや高い緩傾斜地である。調査区南で地山面に掘り込まれた深さ約20cmの溝が検出された。出土遺物はなかったが、溝の性格を明らかにするため、南西に隣接して23B調査区を設定した。

第23B調査区

ここでも第23調査区と同様の溝2本が検出され、まったく方位をそろえ、ほぼ等間隔で並んでいることが判明し、これらの溝は近代にこの地方で養蚕が盛んになった際の桑を植えた溝であることが判明した。この調査区からも出土遺物はなかった。

第24調査区

第23B調査区の西約230mの扇状地末端の畑地に設定した調査区で、地表の標高は約3.6mである。地表

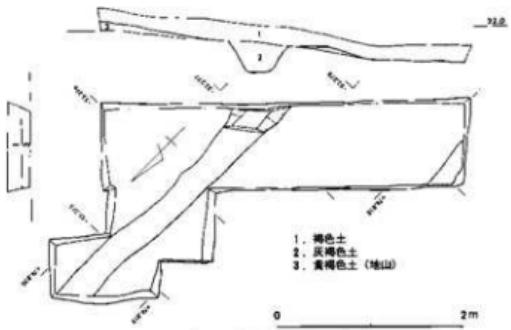


図30 第23B調査区 (1/60)

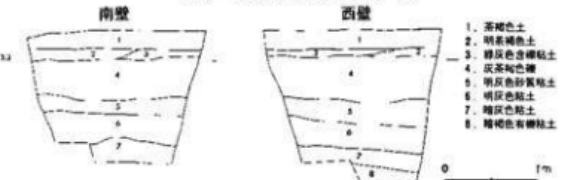


図31 第24調査区 (1/60)

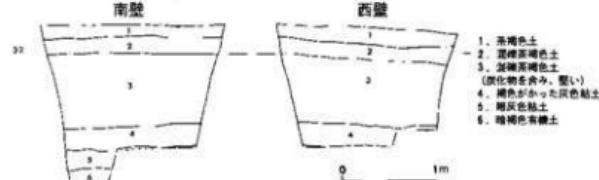


図32 第25調査区 (1/60)

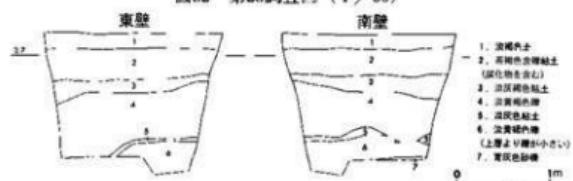


図33 第26調査区 (1/60)

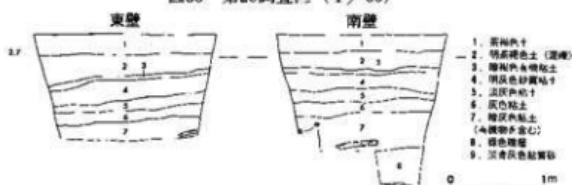


図34 第27調査区 (1/60)

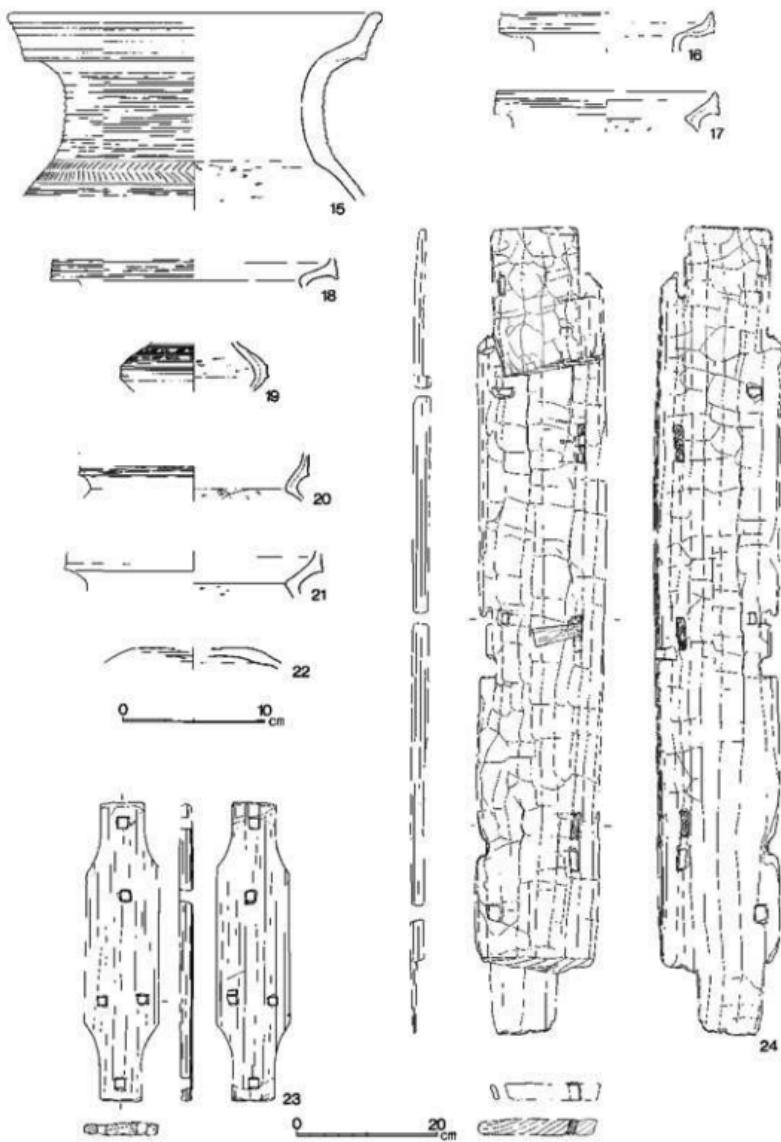


図35 第27調査区出土遺物 (15~22: 1/4, 23, 24: 1/8)

下に厚い硬層があり、その下部には粘質土、有機質土が堆積している。出土遺物はなかった。

第25調査区

第24調査区の西約40mの畠地に設定した調査区で、地表の標高は約3.5mである。耕作土下には厚い硬混じりの層があり、その下部には有機質の土壤がある。出土遺物はなかった。

第26調査区

第25調査区の西約90mの扇状地末端の水田面に設定した調査区で、地表の標高は約2.9mである。調査区下半には厚く硬が堆積している。出土遺物はなかった。

第27調査区

第27調査区の南西約20m、やはり扇状地末端の水田面に設定した調査区で、地表の標高は約3.0mである。耕作土下はわずかに北に向かって傾斜した堆積を示し、暗灰色粘土層中には丸太材と共に加工を施した板材などが検出された。

また、この層下面、緑色礫層上面では、弥生時代後

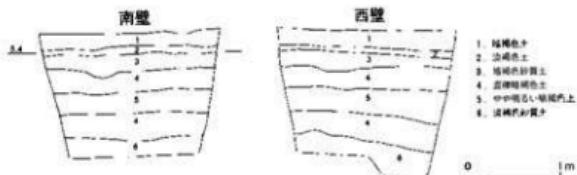


図36 第28調査区 (1/60)

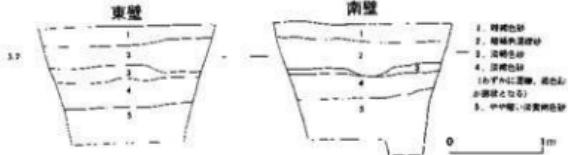


図37 第29調査区 (1/60)



図38 第30調査区 (1/60)



図39 第31調査区 (1/60)

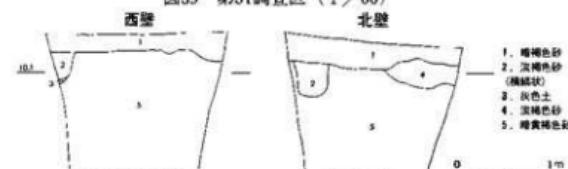


図40 第32調査区 (1/60)

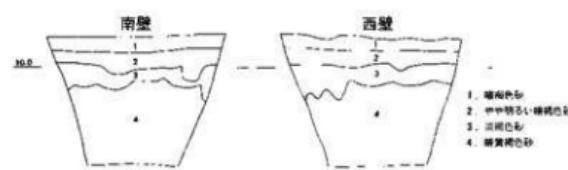


図41 第33調査区 (1/60)

期の上器が出土した。15～21は弥生時代後期の壺や甕で、15は外面に多条の凹線が施され、肩部には貝殻による刺突文がある。19は小形で扁平な体部の壺で、体部最大径付近に2条の突帯をもつ。肩部に貝殻による刺突文をもつ。

22は暗灰色粘土層中で板材とともに出土した須恵器蓋で、宝珠状のつまみをもつものと考えられる。

23は長さ約42cmの田下駄で、裏面には栓を取り付けたと考えられる痕跡がくぼみとして残る。24は用途不明の部材で、長さ約115cm、幅約18cm、厚さ2.5cmを測る。両端にほかの部材を組み合わせた刺込みが残り、また、長辺に沿ってほぞ穴が多數開けられている。ほぞ穴にはほぞが残っているものもあり、この部分では桜皮様の樹皮を挟んでいるのが残存する部分もある。

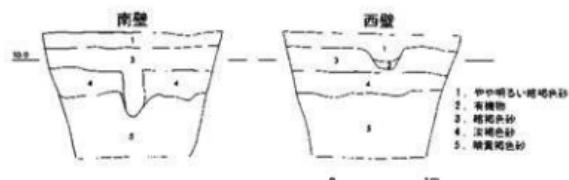


図42 第34調査区 (1/60)

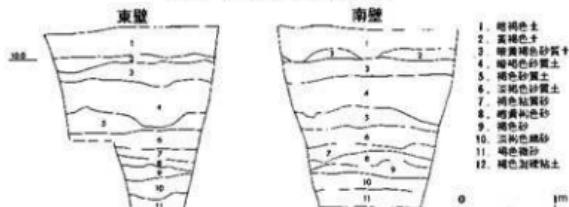


図43 第35調査区 (1/60)

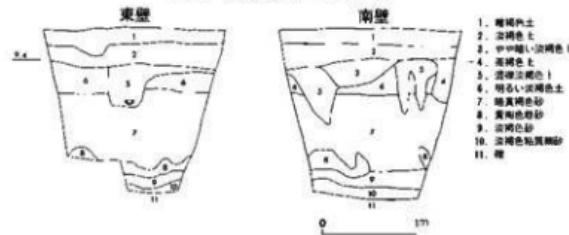


図44 第36調査区 (1/60)

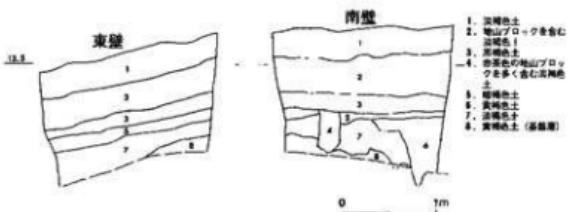


図45 第37調査区 (1/60)

外面にはチヨウナによる加工痕が残る。23、24ともに針葉樹で板目に木取りされたものである。

第28調査区

第27調査区の南南西、約140mの畠地に設定した調査区で、地表の標高は約5.6mである。上層はほぼ水平に堆積し、間に砂質の層を混える。出土遺物はなかった。

第29調査区

第28調査区の南南西約70m、丹蔵池に隣接して設定

した調査区である。地表の標高は約5.5mである。この調査区以西は砂丘部となる。表上下に礫を混える層があるが、基本的には砂が堆積する。湧水が著しい。

出土遺物はなかった。

第30調査区

第29調査区の西約45m、砂地の畑に設定した調査区で、地表の標高は約6.1mである。途中に茶褐色の砂礫層を挟んで、砂が堆積している。出土遺物はなかっ

た。

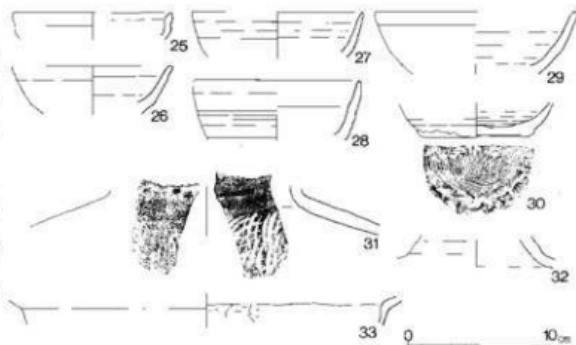


図46 第37調査区出土遺物（1／4）

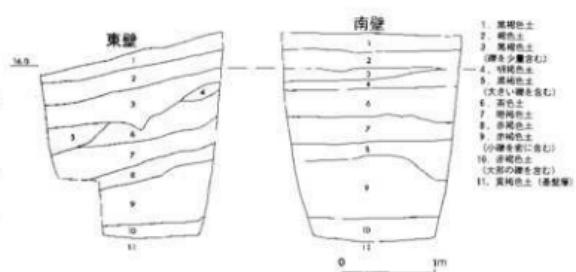
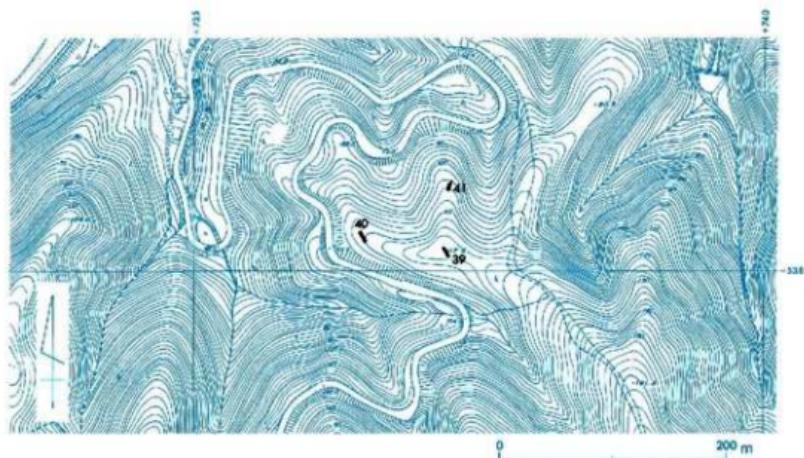


図47 第38調査区（1／60）



第31調査区

第30調査区の西約20mの畑に設定した調査区で、地表の標高は約

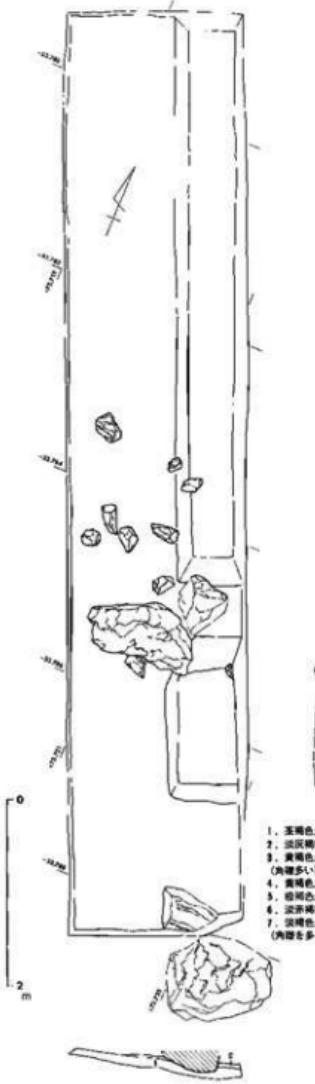


図49

第39調査区 (1/60)

第40調査区 (1/60)



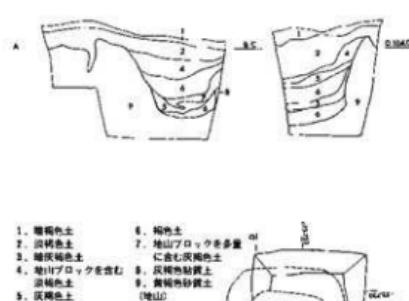


図51 第41調査区 (1/60)



7.1 mである。畑耕作に伴う落ち込みが存在するがそれ以下は暗黄褐色の砂であった。
出土遺物はない。

第32調査区

第31調査区の西約50mの畑に

0 2 cm

図52 第41調査区
出土遺物(1/2) 設定した調査区で、地表の標

高は約10.5mである。やはり耕作下土は暗黄褐色の砂であった。出土遺物はない。

第33調査区

第32調査区の西約50mの畑に設定し、地表の標高は約10.3mである。基本的に砂のみが堆積している。出土遺物はない。

第34調査区

第33調査区の西約20mの畑に設定し、地表の標高は約10.3mである。落ち込みが認められるが、基本的に砂のみが堆積している。出土遺物はない。

第35調査区

第34調査区の西約50mの小扇状地上の畑に設定した調査区で、地表の標高は約10.4mである。砂質土がほぼ水平に堆積しているが、地表下約2mで粘土質となり、この層中に陶器片が含まれていた。扇状地として厚く流入土に覆われているものと考えられる。

第36調査区

第35調査区の西約50mの畠地に設定した。地表の標高は約9.7mである。耕作に伴う擾乱が深く及んでいるが、砂質下に練習が認められる。出土遺物はなかった。

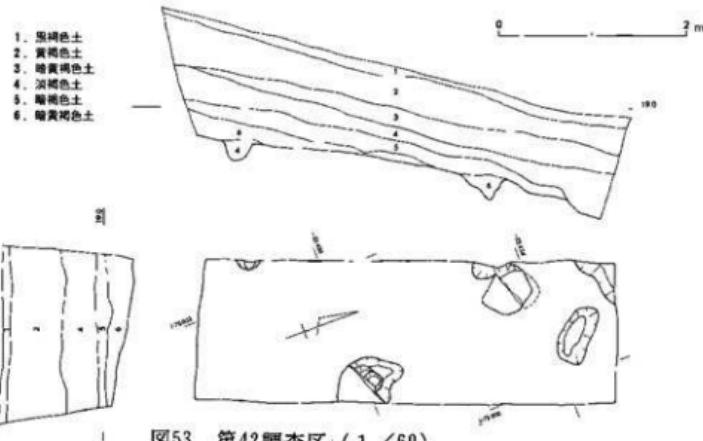


図53 第42調査区 (1/60)

第37調査区

第36調査区の南南西、約100mの谷緩斜面に設定した調査区で、地表の標高は約13.4~13.8mである。調査区底に黄褐色の茶整層が存在し、これに乗る黄褐色土、淡褐色土に遺物が含まれていた。

出土遺物は、25~30が須恵器杯、31、32がそれぞれ須恵器甕と壺である。33は土師器の甕であろう。これらの遺物は30のように回転糸切り痕をとどめており、奈良~平安時代のものであろう。

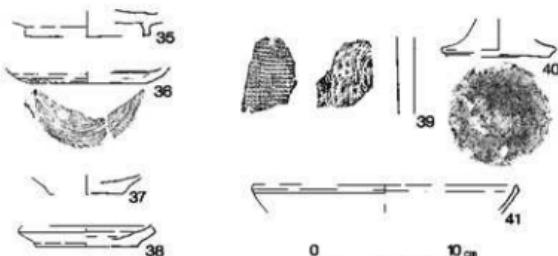


図54 第42調査区出土遺物 (1/4)

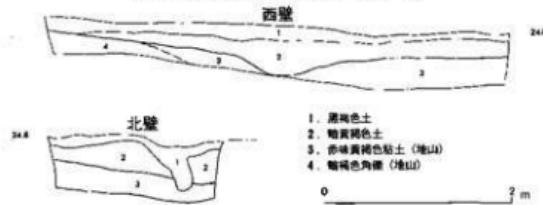


図55 第43調査区 (1/60)

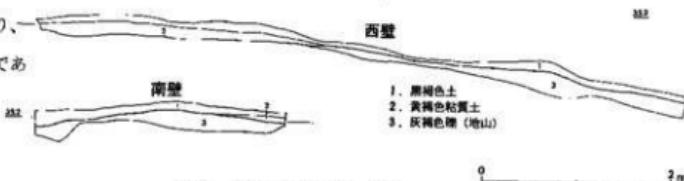


図56 第44調査区 (1/60)

第38調査区

第37調査区のやや南上方に設定した調査区で、地表の標高は約15.9~16.4mである。上層は北に向かってある。緩やかに降っている。



(図57 第45調査区 1/60)

緩やかに降っている。ここでもわずかであるが、上部質土器、須恵器片が出土している。

第39~41調査区は、大字古浦の丘陵上に設定した調査区である。(第48図参照)

第39調査区

丘陵最高所に設定した調査区で、地表の標高は約116.3mである。この付近には大形の石材が散乱していたため、トレンチを設定したが、石材に有為な配列は認められず、また、出土遺物もなかった。ただ、上層に不自然な堆積が認められたが、積極的に遺跡とするにはためらわれるものであった。

第40調査区

第39調査区の西約80mの緩やかな尾根上に設定した調査区で、地表の標高は108.5~106.9mである。表土下は角礫を多く含む地山となっている。出土遺物はなかった。

第41調査区

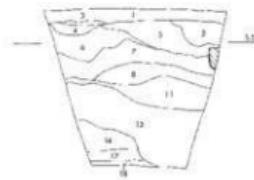
第39調査区の北約60mの尾根上に設定した調査区で、地表の標高は104.3~103.1mである。調査区南端で、落ち込みを検出したため、1m余角の調査区を1個設定して調査を行った。これにより、この落ち込みはさしわたり1.3~1.5mの平面円形ないし隅丸方形の土坑と考えられた。この土坑上層から須恵質の焼きの長辺4.7cm、径2.3cm、現状での重さ14gを測る土鉢34が出土した。土坑内の覆土は軟らかく、埋められてさほど年月が経っているものとは考えられなかった。

志谷奥遺跡から北に約150mの丘陵を圃場整備用の土取りのために削平する必要が生じたため、急速4か所の調査区を設定して調査を行った。

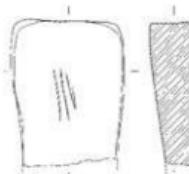
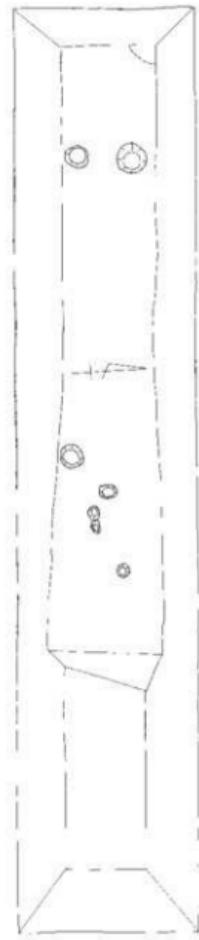
第42調査区

第16調査区の西約80mの丘陵の深い谷部に設定した調査区で、地表の標高は20.0~19.0mである。黄褐色の基盤層に土坑が4個掘り込まれており、また、調査区北側には段状の落ち込みがあった。調査区下半の暗褐色土、暗黃褐色土中には遺物が包含されており、据立柱建物などの遺構が存在するものと判断された。

出土遺物は、35、36、39が須恵器、37、38、40が上部質土器で、41は白磁である。35は高台をも



- | | |
|-----------|---------------|
| 1. 黑褐色土 | 12. 雾灰褐色土(砂質) |
| 2. 淡灰褐色土 | 13. 褐褐色土 |
| 3. 赤褐色土 | 14. 茶褐色砂質土 |
| 4. 暗褐色土 | 15. 墨灰色粘土 |
| 5. 淡黄褐色土 | 16. 灰褐色砂質土 |
| 6. 淡褐色土 | 17. 墨黄褐色土 |
| 7. 土色土 | 18. 雾灰色土 |
| 8. 灰褐色土 | 19. 明赤褐色砂質土 |
| 9. 淡灰褐色砂壤 | 20. 青灰色砂質土 |
| 10. 灰色土 | 21. 墨灰色砂壤 |
| 11. 暗灰褐色土 | 22. 淡黄灰色砂質土 |



0 10 cm

图58 第46调查区 (1/60)

图59 第46调查区
出土遗物 (1/4)

ち、高台内面に回転糸切り痕をとどめるもの、36は高台をもたず、回転糸切り痕をとどめるものである。37、38は土師質土器杯で、摩耗しており糸切り痕などの調整痕は観察できない。40はやはり土師質の脚付杯であろう。底部に回転糸切り痕をとどめる。白磁碗41は、いわゆる毛縁の口縁部をもつもので、淡黄白色を呈する。これらの遺物から、この付近には古代から中世の遺跡が埋蔵されているものと考えられた。

第43調査区

第42調査区の南西約20mの緩斜面に設定した調査区で、地表の標高は約25mである。暗褐色の角礫と赤味をおびた黄褐色粘土の地山となっている。地山上の暗黄褐色土から須恵器小片が出土している。

第44調査区

第43調査区の南東約40mの尾根上に設定した調査区で、地表の標高は35.3~34.6mである。表土の下はほぼすぐに地山となる。出土遺物はなかった。

第45調査区

第44調査区の北東約30mに設定した調査区で、地表の標高は約30.8~30.0mである。ここでも表土の下はほぼすぐに地山となる。出土遺物はなかった。

第46調査区

第27調査区の南約25m、旧根連木集会所跡地に設定した調査区で、地表の標高は約5.8mである。表土下は近現代の擾乱が深く及んでいるが、地表下約1.5mで浅い土坑を検出した。

調査区内上半で、青磁碗42、土師質土器43~47、砥石48を検出し、下半で須恵器49~51が出土した。

IV. 小 結

今次の試掘調査事業では、大字佐陀本郷から大字古浦にかけての調査を行ったが、志谷奥遺跡に銅鐸、銅剣を埋納した直接の弥生集落は発見することができなかつたが、この調査により、下谷遺跡、稗田遺跡、伴次山遺跡を発見し、平成5年度の調査で下谷遺跡では、古代から中世の住居址5棟、稗田遺跡では古代から弥生時代にかけての木製品多數を発見するところとなつた。特に稗田遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての準構造船の一部と考えられる部材や弥生時代中期から後期を中心とする大量の木製品が泥炭層の中に含まれており、『出雲國風土記』秋鹿郡恵譽坂の記述をほうふとさせる調査となつた。また、同遺跡では、木製品包含層下からわずかであるが縄文晩期にさかのぼる上器の出土もみており、早くからこの地域を水田とするための取り組みが行われているものと考えられる。

事業計画予定地が広大で、実施年度も差し迫った中での調査であり、十二分な調査とは言い難いが、こうした試掘調査を積み重ねていくことにより、地域の古代史像が徐々に明らかになっていくものと考えられる。

注

1. 山本 清「佐太講武貝塚」『講武村誌』講武村誌刊行会 1955年)
『佐太講武貝塚発掘調査報告書』鹿島町教育委員会 1993年
2. 「佐太講武貝塚発掘調査報告書」2 鹿島町教育委員会 1994年
3. 『講武地区農業整備事業発掘調査報告書4 北講武氏元遺跡』鹿島町教育委員会 1989年
4. 金関丈夫「島根県八束郡古瀬遺跡」(『日本考古学年報』16 1963年)
藤田 等「鳥根県 古瀬遺跡」(『探訪弥生の遺跡 西日本編』 1987年)
5. 山本 清「佐太橋付近の弥生式遺跡」(『講武村誌』講武村誌刊行会 1955年)
6. 『志谷奥遺跡』鹿島町教育委員会 1976年
7. 『若田考古』第16号 島根大学考古学研究会 1983年



図版 2



第 1 調査区



第 4 調査区



第 8 調査区



第11調査区



第14調査区



第16調査区

図版 4



第18調査区



第20調査区



第21調査区



第23調査区



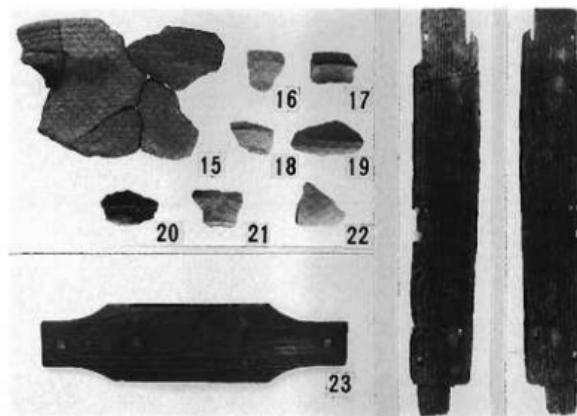
第26調査区



第27調査区



第27調査区
木製品出土状況



第27調査区
出土遺物
24



第29調査区



第33調査区



第34調査区



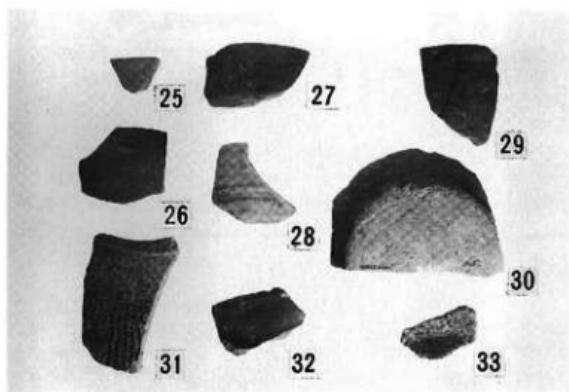
第35調査区



第36調査区



第37調査区



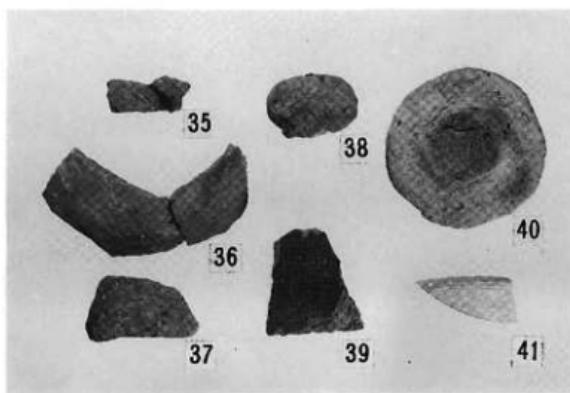
第37調査区
出土遺物



図版 10



第42調査区



第42調査区
出土遺物



第46調査区

佐太南地区遺跡試掘調査報告書

1994年3月

発行 鹿島町教育委員会
島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640-1

印刷 柏木印刷有限会社
松江市國屋町452-2